

海を望む アジール



01 海を望みながら穏やかな時の流れを感じる領域

コンセプト

本設計の敷地は平和記念公園内にある摩文仁の丘として知られている霊域ゾーンの奥に位置しており、1つの終着地であり折り返し場所でもあるこの土地にどのような「海を眺められる休憩所」が望ましいかを考えました。その場所に辿り着くまでの長い上り坂の両側には各都道府県等の「戦争や平和に対する碑文」が添えられた「慰霊塔」が立ち並んでおり、「戦争」「慰霊」そして「平和」といった様々な「色」を強く感じる登り坂となっているのかもしれませんが。そんな長い上り坂の終着地である休憩所ではせめて穏やかな心で休息をとって欲しいと思いました。

「アジール」という言葉には（聖域、無縁所、自由領域）という意味があります。ここはただただ美しい沖縄の海を眺めながら穏やかな時の流れを感じるられる場所、自然と建築が共に存在する曖昧な領域のような施設、そんな様々な「色」とは無縁の「海を望むアジール」を提案します。



02 既存休憩所を「海を望むアジール」に変化させる

「屋根と内部空間」

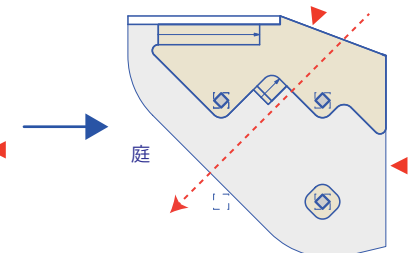
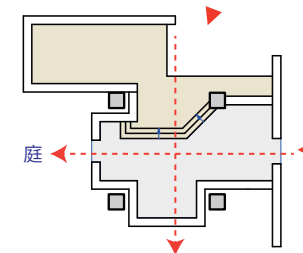
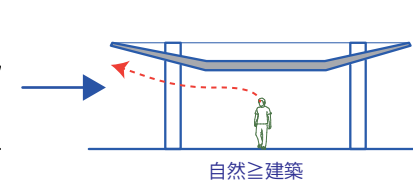
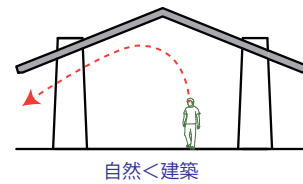
既存休憩所の内部空間は天井が高く、視線がまず縦方向に奪われてから低い軒の先にある自然に移るといった行為が発生してしまい、自然と建築の間に隔たりを感じてしまいます。自然と建築との領域を曖昧にしつつ視線が建築から自然へもっとシームレスに繋がるように屋根を外部に向けて弧を描きながら少し開くこととしました。

「建物の方向と柱」

休憩所の軸方向を既存から45°振ることで海を望みやすくなり、西側の開いた庭スペースとも一体感のある配置計画となります。また存在感のある太いRC柱は基礎と立ち上がりを残して鉄骨柱に変更し、海を望む上でどうしても邪魔になってしまう海側の柱を1本撤去することで建物内部から海に向かって広がっていくような空間構成としました。

「ガラスレンガブロックと石堀」

鉄骨柱の3方をガラスレンガブロックで囲うことで、外部環境を淡く映り込ませ、柱自体の存在感も薄めることとしました。また視線の妨げとなる石堀は一部以外は撤去し、それらに用いられている石材は腰掛スペースやベンチの立ち上げりに再利用します。



03 シンプルな屋根の操作で分かりやすい空間構成



